2023.11.30発行
vol.135

International University of Health and Welfare
「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

海外保健福祉事情（ラオスでのキャンパスツアー）

特集1 日越外交関係樹立50周年記念
国際医療協力シンポジウム開催

特集2 第13回国際医療福祉大学学会学術大会

5キャンパスで開催!! 大学祭レポート

医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。
国際医療福祉大学

日越外交関係樹立50周年記念 国際医療協力シンポジウム開催

日本とベトナムの外交関係樹立50周年を記念して、本学は、国立チョーライ病院、ホーチミン市医科薬科大学との共催で9月29日、「日越外交関係樹立50周年記念 国際医療協力シンポジウム」を開催した。日本とベトナムをはじめとするアジア全体の医療水準の向上をめざし、ベトナム・ホーチミン市のホテルニッコーサイゴンにて行われた今回のシンポジウムには、日越両国から約400人が参加し、活発な議論が交わされた。

日本とベトナムの両国政府関係者や専門家が参加

オープニングの挨拶や基調講演には、本シンポジウム開催にご協力いただいた日越両国政府関係者らも登壇した。ベトナムからはティエン元保健大臣をはじめ、フオン保健副大臣やクオン保健省医薬品管理局長など、保健省や病院関係者の方々が参加。日本からは、当初基調講演で登壇予定だった武見敬三厚生労働大臣が公務の都合によりビデオメッセージでの挨拶となったことから、急遽日程調整して参加した塩崎彰久厚生労働大臣政務官が、基調講演とパネルディスカッションに登壇した。

●オープニングの挨拶をする高木理事長

●同じく挨拶するベトナム保健省のフオン副大臣

そのほかにも、日本から、CTやMRIなど世界でも有数の医療機器の開発で知られ、本学理事も務めるキヤノンメディカルシステムズ株式会社の瀧口登志夫代表取締役社長や、ベトナム国内最大の製薬会社であるハウザン製薬の経営に携わり、本学評議員を務める大正製薬株式会社の上原茂代表取締役社長のほか、日本における医薬品行政組織のトップを務める独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）の藤原康弘理事長も、基調講演に登壇した。パネルディスカッションには、元厚生労働事務次官で、日本赤十字社の鈴木俊彦副社長もパネリストとして参加した。

本学からは、高木邦格理事長がオープニングの挨拶で登壇したほか、本学医学部の角田亘リハビリテーション医学教授（代表）がシンポジウム全体の司会を務めた。基調講演には、本学大学院の矢冨裕大学院長や福井トシ子副大学院長も登壇した。また、鈴木康裕学長がパネルディスカッションの座長を務め、今回のシンポジウムを総括した。

●基調講演に登壇した矢冨大学院長

●パネルディスカッションの座長を務めた鈴木学長

●グエン チー トゥック
チョーライ病院長

●チャン ジエップ トゥアン
ホーチミン市医科薬科大学総長

ベトナムの医療福祉分野の人材育成に長く貢献してきた本学

本学は1995年の開学以来28年にわたり、主にアジアを中心とする国々から留学生を受け入れ、母国の医療福祉分野を牽引するリーダーを育ててきた。今では数多くの卒業生が母国の医療福祉分野で活躍している。

なかでもベトナムとの関係は深く、1997年にチョーライ病院の経営管理にかかる本学の専門教員を長期派遣して以来、看護やリハビリテーション分野でのフルスカラシップでの受け入れを行ってきたほか、短期・中期の研修も多数受け入れてきた。ティエン保健大臣時代にはチョーライ病院との協力による本格的な日本式人間ドックセンター「HECI」を開設した。また、2001年からチョーライ病院の看護師を受け入れて以来、今日までアジア諸国から多くのフルスカラシップの留学生の受け入れを実施しており、ベトナムからも看護、言語聴覚、公衆衛生、作業療法、医療経営管理等の各分野から多数の留学生を受け入れている。

2017年に開設した本学医学部では、ハノイ医科大学、ホーチミン市医科薬科大学、フエ医科薬科大学から累計34人の優秀な学生をIUHW医学部奨学金制度で受け入れた。特筆すべきは、6年前には全く日本語が話せない状態だったベトナム人留学生6人全員が、1～2年生の大部分の授業を英語で、その後は日本語で受けるという厳しい環境を乗り越え、本年3月に無事日本の医師国家資格を取得した点だ。今後は毎年4～5人の本学医学部卒業生がベトナムに帰国し、将来、母国の医療分野に貢献する医師として活躍することが期待される。

ベトナムから50人の医療職を日本での特別プログラムに招待

さらに、本学では、日越外交関係樹立50周年を記念して、医療福祉施設にて2週間の研修を受ける特別プログラムを用意し、医師、看護師、リハビリテーション職、学生など医療に携わる方々を50人、日本に招待する。ベトナムの今後を担う医療職の方々がこの特別プログラムで学ぶことが、将来の日越の医療分野における架け橋となることが期待されている。

今回のシンポジウムは、日越両国の参加者による白熱した議論が繰り広げられる場となり、地元の主要メディアにも大きく取り上げられた。参加した多くの関係者からは、シンポジウムでのこうした活発な議論が、ベトナムと日本の医療分野における基盤の標準化を推進し、国境を越えて医薬品や医療機器を同様の基準で使用できるきっかけとなるだけでなく、アジア全体の医療の発展に寄与することにつながったという評価をいただいた。

●渡邊滋在ベトナム日本国大使館次席公使

●瀧口登志夫キヤノンメディカルシステムズ代表取締役社長

●上原茂大正製薬代表取締役社長

●（左から3人目から順に）藤原PMDA理事長、塩崎厚生労働大臣政務官、ティエン元ベトナム保健大臣、鈴木日本赤十字社副社長を中心に、活発な議論が交わされたパネルディスカッション

第13回国際医療福祉大学学会学術大会 ～共に創る医療・福祉と教育～

第13回国際医療福祉大学学会学術大会（大会長：上田克彦成田保健医療学部放射線・情報科学科長）が9月3日、成田キャンパスW棟2階大講義室をメイン会場に開催された。成田での開催は一昨年に次ぐ2回目となった。

DXがちりばめられたプログラム

大会テーマは「共に創る医療・福祉と教育」。開会にあたり、鈴木康裕学長（学会長）は2025年に本学が創学30周年を迎え、30年を一区切りとすれば創学第2期に入っていく、と指摘。「その柱の1つがDX（デジタルトランスフォーメーション）であり、5つのキャンパス、多くの学科を抱える本学の強みを生かし、距離、垣根を越えて盛り上げていってほしい」と強調した。

上田大会長は今学会について「DXがちりばめられたプログラム」と説明、「メタバース（仮想空間）を利用したプログラムを楽しんでほしい」と開会の辞を述べた。

今回の大会では、一般演題に昨年を上回る333演題のエントリーがあり、特に優れた優秀8演題が口述発表された。このほか、特別講演、2つの教育講演、最後に「共に創る国際医療福祉大学の将来」と題したシンポジウムが行われた。

●開会のあいさつをする鈴木学長

●開会の辞を述べる上田大会長

メタバースを体感

一方、昼食時間などを利用して、W棟学生ラウンジを利用して、「MREAL（エムリアル）を使用した解剖学・フィジカルイグザミネーションの学修」と題した体験プログラムが行われた。参加者は特殊ゴーグルを装着して、身体の内部が立体的に見える様子を体感していた。

MREALは、キヤノンITソリューションズ製の教材で特殊ゴーグルを使用して人体の模型を見ると、人体内部の様子が立体的に見える。今後この機材を利用した医療人材育成に欠かせない解剖の知識、技術の習得への応用が期待されている。本学では、同社と協力して身体の解剖学修、肺・心臓の聴診のためのコンテンツを作成した。

昼食時間に行われたメタバースの体験プログラム

教育講演は「医学教育におけるVirtual Reality/Mixed Reality　～IUHW VR医学研究会の活動を中心に～」と題して国際医療福祉大学大学院の吉岡直紀教授が、Virtual Realityの医学への応用をテーマに2021年12月に発足した「VR医学研究会」の活動やこれまでの成果について、動画などを交えて解説。MREALを用いての人体観察、成田病院における、中心静脈カテーテル留置講習のVRコンテンツ作成などの様子を紹介した。

もう1つの教育講演では、医療・福祉分野の多職種間で1人の患者様の様子を同じ基準のシートで把握できる生活支援記録法、F-SOAIP（エフソ・アイピー）を開発、多岐にわたる医療福祉分野での導入を提唱している国際医療福祉大学大学院の小嶋省吾特任教授が、「（F-SOAIPの導入は）医療分野でのDX推進に役立つ」と訴えた。

将来構想勉強会の成果を発表 ―シンポジウム

今回のシンポジウムでは、本学がこれからの発展を見すえて近未来の具体的な将来構想を語り合うために鈴木学長主催で立ち上げた「将来構想勉強会」の5つのグループがこれまでの話し合いの成果を発表した。

5つのグループの内訳はそれぞれ「全学での効果的なデジタル教材の活用」（グループ1）、「キャンパス横断型で総合教育科目の充実を図るために」（グループ2）、「学生募集ー高大連携の拡充とDX活用ー、在学中から卒後におけるDX活用」（グループ3）、「“真の国際性”と“研究力向上”を通じた人材育成が将来の国際医療福祉大学を創る」（グループ4）、「国際医療福祉大学が取り組むべき未来ーSDGsー」（グループ5）。

シンポジウムに先立ち鈴木学長は「5つのキャンパス、多くの学科という本学の強みを生かした学生指導のボトムアップを図り、いい提案があればそれを実現させていきたい」と総括した。

●優秀発表者の表彰式後の記念撮影

●メタバース実演中、パソコンに表示された画面のキャプチャー

学術大会プログラム内容

■優秀演題口述発表Ⅰ

座長：成田保健医療学部 医学検査学科長　清宮 正徳

●「MRI操作手技訓練シミュレーション教育システムの開発および既存システムとの比較」
成田保健医療学部 放射線・情報科学科　椛沢 宏之

●「時計遺伝子発現を用いた早期疾患発症時期を毛1本から検出するシステム構築」
薬学部 薬学科　浜田 俊幸

●「DPCデータを用いた食道癌手術における術前コルチコステロイド投与と短期術後成績の関連の分析」
※オンライン動画発表
医学部 消化器外科学教室　平野 佑樹

●「アルツハイマー病における血液バイオマーカーの実用化」
福岡薬学部 薬学科　今村 友裕

■優秀演題口述発表Ⅱ

座長：成田看護学部 看護学科長　岡田 佳詠

●「乳がん術後上肢リンパ浮腫に対する予防及び早期治療プログラムの構築」
成田保健医療学部 理学療法学科　岡道 綾

●「造血器腫瘍における日本人高齢者の特徴的な遺伝子変異」
ゲノム医学研究所　野本 順子

●「手の震えに効果的な自助具開発　一既存自助具の効果検証　ユーザビリティ評価に着目して一」
保健医療学部 看護学科　秋葉 喜美子

●「Extended Reality（XR）技術による看護学科1年生の身体機能・構造とヘルスアセスメントの知識への影響」
成田看護学部 看護学科　島田 伊津子

■教育講演Ⅰ

「専門職実践の可視化・関連職種連携・リアルワールドデータ利活用に資するF-SOAIP」
演者：大学院医療福祉分野 特任教授　小嶋 省吾
座長：医療福祉学部長　山本 康弘

■特別講演

「本学（大学院）における研究の方向性について」
演者：大学院長　矢冨 裕
座長：学長 学会長　鈴木 康裕

■教育講演Ⅱ

「医学教育におけるVirtual Reality/Mixed Reality ～IUHW VR医学研究会の活動を中心に～」
演者：大学院 放射線・情報科学分野 教授　吉岡 直紀
座長：国際医療福祉大学成田病院 病院長　吉野 一郎

■シンポジウム

メインテーマ**「共に創る国際医療福祉大学の将来」**
座長：成田保健医療学部 学部長・理学療法学科長　西田 裕介
オーガナイザー：学長 学会長　鈴木 康裕
メタバース監修：大学院医学研究科、福岡薬学部薬学科 教授　岸 拓弥

●グループ1「全学での効果的なデジタル教材の活用」
●グループ2「キャンパス横断型で総合教育科目の充実を図るために」
●グループ3「学生募集 -高大連携の拡充とDX活用- 、在学中から卒後におけるDX活用」

●大会会場の様子

●グループ4「“真の国際性”と“研究力向上”を通じた人材育成が将来の国際医療福祉大学を創る」
●グループ5「国際医療福祉大学が取り組むべき未来 -SDGs-」

■優秀演題表彰者

■学会長賞
成田看護学部 看護学科　島田 伊津子

■学術大会長賞
福岡薬学部 薬学科　今村 友裕

■優秀賞（口演）
成田保健医療学部 放射線・情報科学科　椛沢 宏之
薬学部 薬学科　浜田 俊幸
医学部 消化器外科学教室　平野 佑樹
成田保健医療学部 理学療法学科　岡道 綾
ゲノム医学研究所　野本 順子
保健医療学部 看護学科　秋葉 喜美子

■優秀賞（ポスター）
大学院医療福祉学研究科 看護学分野　熊田 奈津紀
保健医療学部 理学療法学科　広瀬 環
成田保健医療学部 理学療法学科　堀本 ゆかり
福岡保健医療学部 理学療法学科　下田 武良
福岡保健医療学部 作業療法学科　長谷 麻由
福岡国際医療福祉大学医療学部 言語聴覚学科　豊嶋 明子
保健医療学部 視機能療法学科　内川 義和
福岡保健医療学部 医学検査学科　小荒田 秀一
成田保健医療学部医学検査学科　片山 博徳
薬学部 薬学科　辻 稔
福岡薬学部 薬学科　村田 祐造
医療福祉学部 医療福祉マネジメント学科　高石 麗理湖
留学生別科　豊増 有紀子
医学部 医学教育統括センター　ヒガブ 中井 アハマド
基礎医学研究センター　河原﨑 和歌子
国際医療福祉大学成田病院 小児外科　渕本 康史
医学部免疫学　三沢 彩
医学部免疫学　CHAW-KYI-THA-THU
基礎医学研究センター　松野 義晴
医学部医学科　ジエップ カム ヴー
国際医療福祉大学成田病院 皮膚科　乗松 雄大
国際医療福祉大学三田病院 消化器センター　篠田 昌宏
国際医療福祉大学成田病院 糖尿病・代謝・内分泌内科　竹本 稔
国際医療福祉大学成田病院 消化器外科　板野 理
国際医療福祉大学成田病院 小児科　植田 由依
国際医療福祉大学熱海病院 消化器内科　坂本 康成

海外保健福祉事情
コロナ禍以前の規模で実施

国際的センスを備え、真の国際人養成をめざす本学の基本理念を実現するため、1999年から正規授業科目となった「海外保健福祉事情」がコロナ禍を経て今年度からコロナ禍以前の規模で始まった。総合教育科目の本講座では、世界各地に10日から2週間訪問し、現地で研修を受ける。本格的に再開することになった今年夏季の講座は14か国・地域、25の医療機関で実施され、大田原、成田、東京赤坂、小田原、大川、福岡国際医療福祉大学の学生757人が参加。それぞれの国の医療・福祉事情を学んだ。今号では、このうち、9か国・地域で研修を受けた9グループのレポートを紹介する。

（成田国際交流センター　保田亮）

インドネシア　ウダヤナ大学

国際的視野を持てる貴重な学びの機会

成田保健医療学部 理学療法学科
学部長・学科長　西田 裕介

8月2日から11日まで、インドネシア・バリ島のウダヤナ大学の研修に参加し、同国各地の大学生と交流する機会を得た。研修は医療・福祉の施設見学、学生間の交流、世界文化遺産探訪やネイチャーツアーなど内容の濃いものだった。学生間交流では、同大学教員による授業で得た知識をもとに、学生が5グループに分かれ、テーマに沿ったポスターをつくり、プレゼンテーションを行い、ベストポスターを選んだ。国際性豊かな医療人となるために必要な国際的な視野を拡大できる、貴重な学びの機会だった。

国の壁を越えて接する大切さ

成田保健医療学部 理学療法学科　久保 綺音

現地の医療事情を学ぶ中で、現地の方の寛大な心と優しさが印象的だった。訪問させていただいた施設の方々やインドネシア各地の大学生などたくさんの方と交流させていただいたが、サポートしてくれた現地の学生さんは私たちが困らないように常に気づかってくれた。その中で私は、伝えようとすることの重要さを知った。

言語が異なり理解ができなくても、アイコンタクトや表情でニュアンスはつかめる。国の壁を越えて人と接することの大切さを学ぶことができ、とても有意義な経験となった。

●研修の様子

●世界文化遺産を探訪した

オーストラリア　グリフィス大学

異文化の結節点

福岡薬学部 薬学科
助教　福田 光良

研修には学生39人、教員2人が参加した。研修プログラムは、英語の講義だけでなく、看護のラボツアー、病院・介護施設への訪問が実施された。

学生らが通ったグリフィス大学では、全学55,000人の学生のうち1割が留学生。移民を積極的に受け入れてきた国だけに、留学生らに寛容な様子がうかがえた。キャンパスは、まさに異文化のjunction（結節点）だ。

短期間の研修だが、これらの経験を生かし、将来積極的に異国の地で活躍できる人材になってほしい。

異文化体験を通して成長

福岡薬学部 薬学科　吉水 成美

通学や買い物は、大学までの道を調べて電車やバスを1人で乗り継がなければならず、とても不安だった。しかし、徐々に慣れてくると、とても居心地がいい場所だった。ゴールドコーストは、広大な緑、美しい海があり、まさに楽園のような場所。地元の人は、明るく優しかった。

グリフィス大学の先生はいつも笑顔で、講義では学生の考えを常に尊重し、自信をつけさせてくれた。ホストファミリーとは、日豪の文化を共有できた。ゴールドコーストでさまざまな新しい経験を通して、たくさん成長できた。

●ゴールドコーストの街中で

●研修の様子

カンボジア　カンボジア国立保健科学大学

日本との違いを実感

小田原保健医療学部 理学療法学科
学科長　久保 晃

8月5日から15日、大学内の視察に加え、首都プノンペンやシェムリアップにある病院や保健センターなどを訪問した。アンコールワット観光を含む盛りたくさんで充実した研修だった。参加者は教員2人と小田原、福岡、大川の学生19人だった。

同国では一定所得以下の人の医療費は国が負担してくれるが、環境整備が追い付いておらず、日本との違いを実感した。研修後半に3人が体調を崩したが、手際よく本部と連携を取り、適確なケアを展開していただけたおかげで無事に全員帰国することができた。

患者に寄り添う医療につながる思いやり

小田原保健医療学部 看護学科　吉田 莉彩

さまざまな医療施設を見学したが、大半の病院の医療費が無料だったことが印象に残っている。設備や医療サービスは日本と比べ低水準だったが、貧しい人々でも適切で安心な医療を受けられるように現地の医療従事者らは力を注いでいた。

国立保健科学大学の学生との交流では、折り紙やダンスを通して楽しい時間を共有できた。日本とは異なる医療事情を知り、医療従事者や学生、先生方と関わる中で人の温かさと思いやりを感じた。この温かさはカンボジアの、患者に寄り添った医療につながっているのだと実感した。

●シミュレーションの設備の説明を受ける様子

●保健科学大学の学生と交流

フィリピン　フィリピン大学

バリエーションに富んだ研修プログラム

福岡薬学部 薬学科
講師　今井 竜也

今年度のフィリピン研修は、福岡保健医療学部から4人、福岡薬学部から4人、福岡国際医療福祉大学医療学部から2人の計10人が参加した。現地の9月は雨季だったが、幸い天候にも恵まれ、各種レクチャー・レクリエーション、施設見学に観光と、バリエーションに富んだ学習プログラムを、滞りなく実施することができた。

食あたりで体調を壊したり、英語でのレクチャーに苦労したりはあったが、フィリピンの雰囲気を体感しつつ学び、過ごすことができたと思う。

仲間の大切さを知る

福岡保健医療学部 作業療法学科　徳永 琉笙

フィリピンでの病院や関連施設での見学を通じて、日本にはないいいところ、医療事情、医療に対する考え方について知ることができた。また、自分たちの常識が通じない土地に約2週間滞在する中で、トラブルにも見舞われ研修が予定通りに進行しないこともあったが、現地の方々や先生方のフォローで、無事に全研修プログラムを完遂することができた。海外研修でリーダーをしてみて、自分を支えてくれる仲間の大切さを知ることができた。日本にいるだけではわからない経験や学びを今後の生活に生かしたい。

●研修の様子

●折り紙で交流

モンゴル　モンゴル国立医科大学

モンゴル文化に触れる貴重な機会

福岡薬学部 薬学科
助教　坂井 崇亮

首都ウランバートルにあるモンゴル国立医科大学（MNUMS）にて、福岡国際医療福祉大学から3人、国際医療福祉大学大川キャンパスから11人がお世話になった。第3中央病院や日本モンゴル教育病院、高齢者介護施設等の施設見学を通じて、現地の福祉事情を学ぶことができた。また、休日には郊外のテレルジ国立公園にて観光を行った。ビルが立ち並ぶ首都から一変、広大な草原地帯に囲まれる中で鷹匠体験や乗馬体験、ゲル泊体験を行い、モンゴル文化に触れる貴重な機会となった。

日本との共通点、相違点を知れた

福岡薬学部 薬学科　中村 紗也加

9月5日から15日までの11日間で病院見学や大学見学、日本大使館訪問、国際協力機構（JICA）訪問などさまざまな施設を訪れた。日本のJICAの支援で作られた病院は日本と変わらない水準の機器があり驚いたが、首都ウランバートルから離れると医療従事者の不足が特に目立っており、今後の課題点であると感じた。日本ではなかなか見ることのできない緑一面の景色には圧倒された。今回の研修で日本との共通点や相違点を知ることができ、有意義なものとなった。

●研修施設の説明を受ける

●テレルジ国立公園での鷹匠体験

ラオス　ラオス国立健康科学大学

世界の多様性を肌で感じる体験

成田保健医療学部 医学検査学科
教授　竹内 啓晃

参加学生（成田・大川・福岡）は、ラオスに関する事前調査・知識を持って訪問した。しかし、異文化や社会・医療環境に実際に触れ、交流を経て、日本との大きな相違を感じたようだ。同時に、厳しい環境・状況の中での創意工夫に感銘を受けるとともに、本交流を通じて国際貢献の重要性や世界の多様性を肌で感じる大変に良い経験になった。この経験を通じて「国際性」を意識した将来ビジョンを考える学生もいた。本研修で得た学生交流の継続を期待したい。

発展途上の医療を体験した10日間

成田保健医療学部 医学検査学科　中尾 くるみ

10日間のラオスでの現地研修では、発展途上国の医療の現状を学ぶことができた。首都にある病院はさまざまな診療科があり、建物も広い一方、郊外にある病院やヘルスセンターは衛生環境や医療機器の不足が目立ち、国内での医療格差を感じた。こうしたなか、各医療施設がこれらの課題と向き合い1人でも多くの患者を救うために努力していた。ラオスの方々は穏やかで思いやりの精神にあふれる方が多く、研修以外でも充実した時間を過ごすことができた。

●研修4日目 郡部の医療施設見学

●最終日のTOMODACHI HOUR

台湾　元培医事科技大学

日本人学生の主体性、サポートする台湾人学生

成田保健医療学部 作業療法学科
准教授　五味 幸寛

3キャンパスの学生73人と教員4人が研修に参加した。研修では元培医事科技大学の教職員と学生ボランティアによる協力のもと、台湾の医療制度やIT技術、中国語に関する講義を受けた。また、文化体験が豊富に組み込まれており、学生ボランティアとの交流が行われた。病院の視察は、新竹市や台北市などの5病院に受け入れていただき、ひとりの学生が2つの病院を視察することができた。主体的に行動していた日本の学生たちと献身的にサポートする台湾の学生たちの姿が印象に残っている。

感動的だったTOMODACHI HOURの時間

成田保健医療学部 放射線・情報科学科　若松 拓未

台湾における医療福祉事情や文化、生活について触れる機会がとても多く、充実した研修だった。患者中心を重視した病院の努力や技術を学び、お互いの文化を理解し合うことができた。また、研修先の先生方や学生、通訳の方々などが私たちを暖かく迎え入れてくださり、台湾の魅力も十分に知ることができた。特に、最終日前日に行ったTOMODACHI HOURでは感動的な時間を過ごすことができた。関係者の方々のおかげで、はじめは不安でいっぱいだった海外研修が有意義なものとなった。

●記念撮影

●台湾の食文化を堪能した

韓国　大邱韓医大学

リハビリ系、薬学部向けの講義が追加

福岡保健医療学部 医学検査学科
助教　西之園 栞

本研修は8月2日から11日間、3キャンパス7学科40人の学生、引率教員2人の計42人が参加した。例年、医学検査学科向けのカリキュラムだったが、今年度よりリハビリ系や薬学部向けの講義が追加され、充実した研修内容であった。現地学生がサポートに入る講義やTOMODACHI HOURを通して、学生交流が盛んに行われた。韓国の病院見学にも参加し、韓国の医療の現状を知ることができた。言葉の壁はあったが、積極的に学び交流したことで、海外の医療を学ぶ上で有意義な研修となった。

視野が広がった

成田保健医療学部 医学検査学科　大越 美空

臨床検査技師の業務である、採血、病原性微生物の同定、病理検査のための組織固定や作業療法と理学療法を組み合わせてリハビリテーションとAIを融合させた新しい治療などを教授や現地の学生に教わった。言葉の壁はあったが、わかりやすく教えていただいた。また、クイズや折り紙など日本の伝統を通して友達の輪を広げることができた。実際に韓国の医療機関を見たことで日本との差を知ることができ、視野が広がった。この経験を生かし努力したい。

●研修の様子

●現地学生との交流

中国　中国リハビリテーション研究センター（CRRC）

東洋医学や最先端のリハビリロボットを体験

福岡保健医療学部 理学療法学科
助教　劉 振

今年度の中国研修には大川、成田、福岡国際医療福祉大学の3キャンパスの学生20人と教員2人が参加した。学生は中国リハビリテーション研究センター（CRRC）の中医科、漢方薬局、看護病棟、理学療法室、作業療法室、医学検査科、脊椎外科の各部門で病院スタッフに指導してもらった。中国最先端のリハビリ用ロボットを体験し、CRRCの関連施設である北京按摩病院の東洋医学センターで学生たちは鍼灸療法や吸い玉療法を体験できた。学生たちは漢方薬局で生薬を手で触ったり、特有の香りを嗅いだり、興味津々だった。

異文化理解の貴重な経験

福岡保健医療学部 医学検査学科　香月 来光

中国リハビリテーション研究センター内にある検査部での研修は充実したもので、日本での検査室の環境と異なる点や院内の検査システムについても詳しく学ぶことができた。中国語が伝わらず戸惑いもあったが、検査室の方が英語で会話してくれたり、翻訳アプリを使ってくれたりし、実のある研修の時間を過ごすことができた。昼は病院での研修や施設見学、夜にはさまざまな郷土料理を食べることができ、さまざまな人々と関わり、異文化を理解する貴重な経験だった。

●最先端のリハビリ用ロボットを体験

●漢方薬局で生薬を扱う

今回の研修日程

国・地域	受け入れ機関	日 程
インドネシア	ウダヤナ大学	2023年8月2日～11日
オーストラリア	グリフィス大学	2023年9月2日～15日
カンボジア	カンボジア国立保健科学大学	2023年8月5日～15日
フィリピン	フィリピン大学	2023年9月5日～15日
モンゴル	モンゴル国立医科大学	2023年9月5日～15日

国・地域	受け入れ機関	日 程
ラオス	ラオス国立健康科学大学	2023年9月4日～14日
台湾	元培医事科技大学	2023年8月5日～15日
韓国	大邱韓医大学	2023年8月2日～11日
中国	中国リハビリテーション研究センター	2023年8月5日～15日

Campus report キャンパスレポート

●大田原キャンパス　●成田キャンパス　●小田原キャンパス　●大川キャンパス　●東京赤坂キャンパス

5キャンパスで開催！！ 大学祭レポート

国際医療福祉大学は全国5か所のキャンパスでそれぞれ10月7日から8日にかけて大学祭が行われた。コロナ禍以前の形に戻った各キャンパスでは、地域の方々との交流も復活し、賑わいと活気が戻ってきた。そんな大学祭の様子をレポートする。

大田原キャンパス
第28回風花祭　5年ぶりの一般公開

5年ぶりの一般公開となった「第28回風花祭」。実行委員が中心となって来場者が楽しめるさまざまな企画を考え、1年がかりで準備した。今年のテーマは「48時間の青春」。これまでさまざまな制限の中で過ごしてきた学生が「少しでも青春を取り戻せるように」との願いを込めた。

このため、学生団体のステージ出演・出店・展示だけでなく、近隣高校の部活動や市内のお店、吹奏楽団などもお呼びし、地域連携を積極的に行った。また、7日には高校生向けにキャンパス見学会と進学相談会、8日には進学相談会を開催。学科体験コーナーや学科紹介パネルの展示なども実施し、来場する高校生に各学科の魅力を伝える機会を提供した。

多くの方に来場いただいた両日ともに天候に恵まれ、5年ぶりに復活した模擬店の並んだ並木道は、より明るく活気づいた。2日目のラストは打ち上げ花火で締めくくった。

（学生課　齊藤智美）

●にぎわう並木道

●模擬店の様子

●体育館で行われた
大田原市民吹奏楽団の演奏

●野外特設ステージでの学生による
ダンスパフォーマンス

成田キャンパス
第8回成翔祭　「千紫万紅」をテーマに

今回で第8回となる「成翔祭」のテーマは「千紫万紅」。学生一人ひとりの個性を咲き乱れる花のように発揮できる大学をめざし、多様性の大切さを再認識する思いを込めた。

天候にも恵まれ、保護者、地域の皆さまなど約3,800人の方に来場いただいた。校内各所に「謎」をちりばめた「謎解き企画」、日本航空スイングジャズクラブ「シルバーウイングス」による演奏会、ビンゴ大会、体力測定など、さまざまな年代の来場者が楽しめる内容を繰り広げ、学内の雰囲気を盛り上げた。

一方、看護学科・理学療法学科は合同で医療教育体験を企画したほか、各部・サークルがステージパフォーマンスや室内展示を行ったり、模擬店を出した。

8日の教育後援会 会員のつどいでは、坂元亨宇医学部長による特別講演や懇談会が行われ、多くの保護者の方々がご来校になった。また、成翔祭に合わせて「言語聴覚学科説明会」、「成田薬学部説明会」も開催した。

（広報部　城貴弘）

●大階段に飾られた「成翔祭」の装飾

●看護学科、理学療法学科合同の
医療教育体験

●美術部の展示

●ビンゴ大会

小田原キャンパス
第18回潮風祭　5年ぶり 2日間の開催

5年ぶりに2日にわたって、「第18回潮風祭」が開催された。実行委員会メンバーには過去の経験がなかったため、テーマは、新しいことへの挑戦の意味を込め「Revolution」（革命）」と決めた。

1日目の特別講演は、本学学生相談員の内藤恭子先生による「学生期の発達課題とリスク～巣立ちを控えた青年とその家族の在り方について考える～」。参加者は学生と周囲の大人のかかわり方について考える貴重な時間となった。

ステージでは、軽音楽部のライブや歌うま企画、ビンゴ大会、クイズ大会を実施したほか、小田原市と協力した初の企画「ぷよぷよ大会」、「アイデンティティ」と「わらふぢなるお」の2組のお笑いコンビを招待したライブも開催した。

各学科は自分たちの学んでいることを体験してもらえる企画を用意。看護学科は、熱海病院に協力を仰ぎ、同病院の看護師によるBLS（一次救命措置）体験やDMAT（災害派遣医療チーム）隊員による講習会を行った。

（学務課　大木颯人）

●熱海病院のDMAT隊員による講習

●潮風祭実行委員会メンバーとボランティア

●内藤先生の特別講演会

●eスポーツのぷよぷよ大会の様子
©SEGA

大川キャンパス
第19回月華祭　地域の皆さんとの交流の場に

大川キャンパスでは10月7日、8日に「第19回月華祭」が開催された。1年生の実行委員会執行部の16人を中心に、総勢106人で企画・準備を進めてきた。今年のテーマは、「Break through～ぼくらの青春革命～」。活気を取り戻した時間とともに、月華祭の新しい歴史をつくっていきたいという願いを込めた。

特設ステージには、ダンス部のパフォーマンスや軽音楽部の演奏などのほかに、「ぼる塾」や「Everybody」をゲストに迎えたお笑いライブも開催。地元大川市のキッズダンスチームのパフォーマンスも行われた。また部やサークル、留学生別科のクラスを中心とした10の模擬店が出店し、地域の方々や、保護者、入試対策講座に参加した高校生など900人を超える皆さんに楽しんでいただいた。

2日目は悪天候で会場を講堂に移したが、学生にとっては、日々の授業や実習では得られない、地域の皆様たちとの大切な交流の場となった。

（学生係　石橋武彦）

●おそろいのTシャツ姿の実行委員会メンバー

●大川市のキッズダンスチームも参加

●軽音楽部のライブ演奏

●部やサークルの模擬店

東京赤坂キャンパス
第6回茜陵祭　過去最高の来場者数を記録

10月7日に開催された「第6回茜陵祭」のテーマは、「Be Original～最高の活気を今ここに～」。先輩方からの「バトン」を受け取り「東京赤坂キャンパス“らしさ”」をつなぎ、より活気のある大学祭にしたいという思いを込めた。

今年度は食べて楽しむ出店企画に加え、ステージ企画やアロマワックスバー製作、ペーパークラフトAED等、幅広い世代が楽しめる参加・体験型の企画を多く盛り込んだ。

実行委員たちのがんばりもあり、キャンパス設立以来、過去最高となる多くの来場者にお越しいただいた。なお、この日は併せて「ミニオープンキャンパス」「市民公開講座（茜陵祭特別記念講演）」「教育後援会の集い」を開催した。

（事務課　野原大彰）

●バンド演奏の様子

●完成したアロマワックスバー

Institution Information 施設インフォメーション

●国際医療福祉大学成田病院　●国際医療福祉大学病院　●国際医療福祉大学三田病院
●国際医療福祉大学熱海病院　●国際医療福祉大学市川病院　●国際医療福祉大学塩谷病院　●山王病院

国際医療福祉大学成田病院

大規模災害を想定したトリアージ訓練を実施

2022年に災害拠点病院の認定を受けた当院は10月2日、国際ホールで大規模災害を想定したトリアージ訓練を行った。医師・看護師・診療技術部門スタッフ・学生など約50人が、トリアージエリアで負傷者を重傷(赤)・中等症(黄)・軽症(緑)に分け、各エリアで迅速に患者情報をまとめて後方搬送へつなげるという訓練は、限られた医療資源のなか、できるだけ多くの人を助けるため重症度によって負傷者の搬送や治療の優先順位をつけるもの。

終了後に防災委員会委員長・前田剛志教授は「有事に機敏に動くためこのような訓練はとても重要です。今後も病院全体として災害医療への意識を高めていきましょう」、災害派遣医療チーム（DMAT）担当の救急科・千葉拓世医師は「当院は成田空港に近い立地から震災やテロなどに対応していく必要があります。DMATのメンバーが在籍していても、災害時に実際に働くのは職員一人ひとりです。訓練を通じて災害に強い病院をめざしていきましょう」と講評した。

●トリアージ訓練

世界糖尿病デーと「第30回糖尿病教室」

11月14日の世界糖尿病デーに合わせ、11月6～19日に病院の外観をブルーにライトアップした。インスリンの発見者バンティング博士の誕生日である11月14日を中心に世界で行われるこの糖尿病啓発キャンペーンは、予防や治療継続の重要性について周知する重要な機会で、当院では2020年の開院から4回目の取り組みとなった。

11月18日には「第30回糖尿病教室」を開催、これまでの講演形式から初めて参加者体験型で実施した。竹本稔教授（代表）による「糖尿病ライフを輝かせる知識とコツ」という講演に始まり、看護部による足の観察、リハビリテーション室の体組成チェック、薬剤部のお薬相談、検査部の血糖測定、栄養室の味噌汁飲み比べなど、用意されたさまざまな体験に参加者たちは楽しそうに各ブースを回られていた。次回の「第31回糖尿病教室」は2024年1月27日に開催予定。（広報室）

●世界糖尿病デーのブルーライトアップ

●参加者体験型で開催した第30回糖尿病教室

国際医療福祉大学病院

ゲートキーパー養成講座を開催

8月24日、当院B棟5F講堂にて「ゲートキーパー養成講座」が開催された。ゲートキーパーとは、自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応（悩んでいる人に気づき、声をかけて話を聞き、必要な支援につなげ見守る）を図ることができる人のこと。別名として「命の門番」とも呼ばれている。

今回の講座では、講師として栃木県カウンセリング協会代表の丸山隆氏をお迎えし、自殺対策の取り組みからゲートキーパーの役割、自殺の危険のある方への具体的な対応方法まで幅広く話していただいた。来場した参加者たちは真剣な表情で耳を傾け、質疑応答も時間いっぱいまで行われた。

国際医療福祉大学から医療福祉・マネジメント学科3年生の6人も実習の一環として参加。講演終了後には「今までどう声がけしていいかわからなかったが、とても勉強になった」「参加してとてもためになった。よかった」など多くの感想が寄せられた。

（総務課　中野雄斗）

●学生を含む多くの参加者が講義を聴講

国際医療福祉大学三田病院

脳卒中リスクを軽減する「左心耳閉鎖術（WATCHMAN™）」

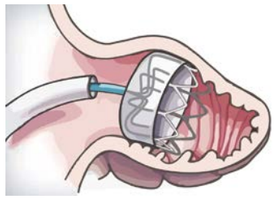
当院では、循環器内科部長の合屋雅彦医学部教授と循環器診断部長の大門雅夫医学部教授主導のもと、脳卒中リスクを軽減する「左心耳閉鎖術（WATCHMAN™）」を行っている。

脳梗塞の原因の1つとして心房細動が挙げられる。それを防ぐためには、血液をサラサラにする抗凝固薬を服用するが、副作用で脳出血や胃腸などから出血しやすくなるリスクもある。そこで注目されるのが「左心耳閉鎖術」だ。

心房細動によりできる血栓の90%が心臓の左心耳と呼ばれる部分にできるのだが、本治療は、左心耳に装置を留置しフタをすることで血栓が形成されるのを防ぐもので、1回の手術で生涯の脳卒中リスクを低減することができる画期的な治療法である。身体への負担は軽く、数日間の入院で行うことができる。

現在、本治療が行える施設は都内でも数施設しかなく、今後積極的に実施していきたい。治療を希望される方は、ぜひ当院に相談いただきたい。

（総務課　山本悦子）


●左心耳閉鎖術（WATCHMAN™）

国際医療福祉大学熱海病院

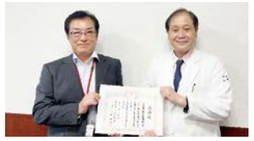
静岡県赤十字血液センターより感謝状を拝受

8月22日、静岡県赤十字血液センターより、当院が10年以上献血に協力していることに対して感謝状をいただいた。

献血は、医療に必要な血液を確保するための唯一の方法である。今なお人工的につくることはできず、少子高齢化が一層進むと血液の確保は非常にむずかしくなる。そのため、献血はますます必要とされている。静岡県赤十字血液センターの北折健次郎所長からは、「2002年に国立熱海病院から国際医療福祉大学熱海病院へ継承され、この地で65年以上も献血を継続していただいているということは、非常にありがたくすばらしい」と称賛の言葉をいただいた。

当院では4か月に1回、玄関前に献血バスが停車し、職員だけでなく、患者様にも献血のご協力をいただいている。今年で2回目となる11月9日にも、13人の方にご協力をいただいた。

今後も、輸血用血液製剤の安定確保につながるよう、継続的に献血への協力を行っていく。（総務課　木村玲於奈／木村寛太）


●感謝状を手にする池田病院長（右）

●当院前に停車する献血バス

国際医療福祉大学塩谷病院

矢板・塩谷地区の児童・園児を対象とした手洗い教室の実施

当院では、毎年恒例の矢板・塩谷地区の小学校・認定こども園・幼稚園・保育園を訪問し、手洗い教室を開催している。

10月中旬から12月初旬にかけて、看護師3人がチームを組んで約20の施設を訪問。イラストや写真のスライドを使って、手洗いやうがいの大切さ、マスクの正しい付け方などについてわかりやすく伝えるとともに、「うさぎとかめ」の歌にあわせた正しい手洗い方法を紹介している。

子どもたちは、自分の手の甲に「ブラックライトで光る蛍光物質入りクリーム」を塗り、正しい手洗いに挑戦。手洗い後にブラックライトに手をかざし、洗い残しがわかると驚きの声をあげ、再び念入りに手洗いを行っていた。「しっかり洗ったつもりだけど、指の間や手首に洗い残しがあることがわかった」「みんなで歌をうたいながら手洗いをして楽しかった」など、子どもたちの率直な感想が寄せられた。

今後もこの活動を継続し、子どもたちに手洗いやうがいの大切さを伝えていきたい。（総務・人事課　後藤文栄）

●手洗い教室風景

国際医療福祉大学市川病院

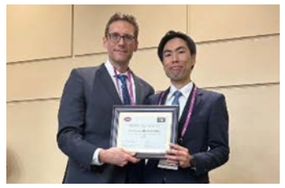
鈴木翔部長が米国消化器内視鏡学会誌の「2023 Reviewer Award」を受賞

消化器内科の鈴木翔部長が、iGIE誌の「2023 Reviewer Award」を受賞した。

iGIE誌は、米国消化器内視鏡学会（ASGE）が発行する学術誌で、消化器内視鏡に関する革新的な技術や手技とデジタルヘルスを中心とした研究論文を公開している。鈴木部長がiGIE誌で務めた査読の数と内容が評価され、同誌へ貢献したトップ査読者の1人として表彰された。

受賞に対して鈴木部長は、「査読は研究者相互の助けにもなるので、同じ研究者としてやりがいを感じる活動です。今回、私の関与がこのように高く評価されたことは、驚きであると同時に大変光栄なことだと感じています」と述べている。

今後も、当院の消化器内科は内視鏡診療の充実を図るとともに、学術研究の発展にも努めていく。（総務人事課　高田聡）



●米国シカゴでの授賞式（右：鈴木部長）

山王病院

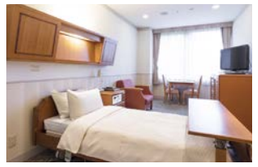
本格始動！山王病院ならではの「産後ケア」と「卵子凍結」

産後の心身の回復や育児指導など、お母さんたちのさまざまなニーズに応える「山王産後ケアセンター」が4月より本格始動した。乳房ケアや赤ちゃんの健康チェックはもちろん、メンタルケアやエクササイズなど、個人の要望にあわせたオーダーメイドのケアプランと質の高い食事が利用者の間で好評だ。重ねて、近隣地区で助成制度が開始されたことで、利用者も増えている。

また、将来の妊娠・出産に備えて、年齢の若い時点での卵子を事前に採取し凍結保存する「社会的卵子凍結」が7月より本格始動した。東京都で10月から卵子凍結に係る費用の助成が始まり、社会的にも注目されている。当院も凍結検体保管庫の増設や安全対策など万全な体制を整え、登録医療機関に認定されている。

産後ケアや卵子凍結の充実により、「お産の山王」としてさらに質の高いトータルサポートが可能となった。

（総務課　青島千恵）


●お部屋（イメージ）

●産後ケアの夕食例（黒毛和牛のローストビーフ重）

Topics トピックス

IUHWグループにおける注目の出来事や話題を紹介します。

成田キャンパス卓球部　全日本医科学生卓球王座決定大会 男子ダブルスで優勝

「全日本医科学生卓球王座決定大会」が10月8日、長野県安曇野市で行われ、男子ダブルスに出場した本学成田キャンパス卓球部の窪田翔太さん（医学部医学科5年）・丸山蒼葉さん（医学部医学科1年）ペアが見事優勝した。丸山さんは男子シングルスにも出場し、準優勝を果たした。

「全日本医科学生卓球王座決定大会」の参加資格は、「東日本医科学生総合体育大会（東医体）」、「西日本医科学生総合体育大会（西医体）」の男女シングルス各上位8人、男女ダブルス各8ペアで、医科学生の個人戦での頂点を決めるべく東西で対戦する。

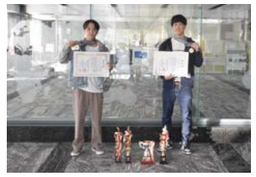
なお、「東医体」は、東日本医科学生総合体育連盟に加盟している38大学の医科学生が23の競技（夏季21・冬季2）に参加する体育大会で、毎回約15,000人が参加する。この「東医体」の卓球競技で、丸山さんが男子シングルス優勝、窪田さんと丸山さんのペアが男子ダブルス優勝を経て「全日本医科学生卓球王座決定大会」出場を果たした。

全国の医科学生トップレベルの選手が集まったハイレベルな戦いを制し、好成績を収めた2人。今回の大会出場にあたり、丸山さんは「東医体での反省を生かしつつ、戦い方を考えて勝つことができました」と語った。一方、窪田さんは「対戦相手が決勝まで関西のペアだったため事前情報がありませんでしたが、お互いの役割をしっかり果たすことで優勝に結びつきました。仲間が応援に来てくれたおかげで、雰囲気にのまれずプレーできました」とコメントしている。

本学の学生団体は上記以外にも、さまざまな競技で好成績を残してる。右記に、第66回東日本医科学生総合体育大会で優秀な成績を収めた学生を紹介する。

（成田キャンパス広報　城貴弘）

●優勝した窪田・丸山ペア



●全医体での賞状とメダルを掲げる丸山さんと窪田さん

● 第66回東日本医科学生総合体育大会（2023年8月1日～14日）

卓球部			
男子シングルス	優勝	丸山 蒼葉	（医学科1年）
男子ダブルス	優勝	窪田 翔太	（医学科5年）
		丸山 蒼葉	（医学科1年）
ボート部			
女子クォドルプル	2位	粕本 亜美	（医学科2年）
		阿南 芽吹	（医学科2年）
		プラトン 瑠花	（医学科1年）
		薛 晶華	（医学科1年）
		百瀬 りん	（医学科1年）
ゴルフ部			
男子団体	3位	布施 大地	（医学科6年）
		佐伯 隆寧	（医学科5年）
		山本 天智	（医学科5年）
		西川 泰一	（医学科2年）
		島本 海一留	（医学科1年）
陸上部			
女子800m	3位	長谷川 玲子	（医学科3年）

大田原キャンパスで地域公開講座

大田原キャンパスで地域公開講座を2回開催した。本講座は、本学の基本理念の一つ「社会に開かれた大学」を実現するため、地域の皆様を対象に開催している。

第1回は10月15日（日）に、本学3期生である鹿児島大学医学部の牧迫飛雄馬教授に、「高齢者のフレイルと認知症予防のためのコグニサイズ」と題し、講演いただいた。日本や世界の高齢者の状況や最新の認知症への運動アプローチであるコグニサイズについて解説いただいた後、座ってできるコグニサイズを体験した。雨が強く寒い日だったが210人が参加し、参加者は和やかな雰囲気のなか、コグニサイズに取り組んだ。

第2回は、3連休最終日の11月5日（日）、本学医学部の松本哲哉感染症学教授（代表）に「今後の新型コロナウイルス感染症との付き合い方」と題し、講演いただいた。コロナウイルス感染症について日本で感染が確認されてからの動向や感染対策、検査、ワクチン接種、後遺症など、また5類感染症になった現在の医療提供体制や治療薬、自己負担額等についてわかりやすくお話いただき、180人の来場者は、熱心に耳を傾けていた。

（大田原キャンパス総務課　深澤望）

●鹿児島大学医学部の牧迫教授

●本学医学部の松本教授（代表）

DNPシンポジウム　東京赤坂キャンパスで開催

東京赤坂キャンパスで9月1日、国際医療福祉大学、聖路加国際大学、北里大学の共催によるDNPシンポジウム2023「Doctor of Nursing Practiceを知ろう」が開催された。

DNPとは、高度実践看護師の最高学位を指す。大学院教育の変革が行われたアメリカ等ではすでに20年前から注目されている。2024年4月に本学大学院で開講するDNPコースでは、実践応用志向の「最終DNPプロジェクト（実装）」を実施する。

当日は、まずワシントン大学大学院でDNPを修了した成澤知華穂看護師による基調講演が行われた。聖路加国際大学の堀内成子学長が座長を務めたシンポジウムでは、DNPコースをすでに実施している聖路加国際大学大学院の麻原きよみ看護研究科長と北里大学高度実践看護学コースの長尾式子教授より、各大学院の取り組みを紹介。その後「国際医療福祉大学大学院への開設」と題して本学の福井トシ子副大学院長が登壇し、DNPコースの今後の展望について講演した。シンポジウムの最後に設けられた質疑応答では、参加者より多数の質問が寄せられ、DNPコースに対する関心の高さがうかがわれた。

（東京事務所病院広報室　山﨑香里）

●福井トシ子副大学院長（左から3番目）と登壇者の先生方

社会福祉法人 邦友会
成田老年医療福祉センター起工式

10月12日、2025年4月開設の成田老年医療福祉センターの起工式が執り行われた。当日は晴天に恵まれ、成田市の小泉一成市長、関根賢次副市長、成田市議会 神﨑勝議長をはじめ、地元区長の皆様、工事関係者なども参加し、建設工事の安全と順調な進捗を祈願した。

成田老年医療福祉センターは特別養護老人ホーム100床、介護老人保健施設100床を中心とした介護福祉施設で、通所、訪問リハビリテーションなどの在宅介護サービスも提供するなど、地域の多様な介護のニーズに応える。また、隣接の国際医療福祉大学成田病院と緊密な連携を図っているため、医療面のサポートも万全であることが大きな特長となっている。

また、本施設には、4月に開設した介護福祉特別専攻科の学生はもちろん、本学成田キャンパスの他学科や、他の医療・福祉の学校からの学生の実習も受け入れる予定だ。医療・福祉を担う優秀な人材を数多く養成し、成田市および千葉県の医療福祉分野に幅広く貢献することが期待される。

International University of Health and Welfare **IUHW CONTENTS** vol.135 November 2023

2～3　特集1　日越外交関係樹立50周年記念 国際医療協力シンポジウム開催

4～5　特集2　第13回国際医療福祉大学学会学術大会

6～9　海外保健福祉事情レポート

10～11　キャンパスレポート　5キャンパスで開催！！ 大学祭レポート

12～13　施設インフォメーション　国際医療福祉大学成田病院／国際医療福祉大学病院／国際医療福祉大学三田病院／国際医療福祉大学熱海病院／国際医療福祉大学市川病院／国際医療福祉大学塩谷病院／山王病院

14～15　トピックス　成田キャンパス卓球部 全日本医科学生卓球王座決定大会 男子ダブルスで優勝／大田原キャンパスで地域公開講座／DNPシンポジウム 東京赤坂キャンパスで開催

15　社会福祉法人 邦友会　成田老年医療福祉センター 起工式

16　キャンパスプラス1　クラブ・サークル紹介　演劇部「劇団ENCORE」（大田原キャンパス）

■お詫びと訂正　広報誌IUHW133号の記事に下記の誤りがありましたので、謹んでお詫びし訂正させていただきます。

P19 学長賞　誤）卒業生総代・卒業生代表（12ページに掲載）→正）卒業生総代・卒業生代表（18ページに掲載）
P28（裏表紙）2022年度 国家資格試験結果　誤）言語聴覚士 小田原 100%→正）言語聴覚士 大川 100%

クラブ・サークル紹介 **IUHW Campus Plus One** キャンパス プラス1 Vol.21

各キャンパスの学生たちが思い思いに活躍するクラブ・サークルをご紹介します。

大田原キャンパス編

演劇部「劇団ENCORE」

学生A「大学でも演劇やりたいね」
学生B「でも、大田原キャンパスに演劇部ないよ?」
学生A「だったら作っちゃおう!」

こんな「また演劇をやりたい!」という会話をきっかけに、私たちは2022年の冬に「劇団ENCORE（アンコール）」を立ち上げました。

「劇団ENCORE」は、現在部員数女性13人、男性5人の計18人で、毎週火曜日と金曜日の18時から大田原キャンパスの教室で活動しています。メンバーは高校演劇や劇団出身などの経験者だけではなく、未経験者もたくさん在籍しており、日々稽古に励んでいます。

劇団は大きく俳優部と制作部に部門が分かれ、制作部では照明や音響、衣装や大道具などの舞台づくりを中心に、裏方で演劇にかかわりたいメンバーが活躍しています。

また俳優部の稽古では、発声練習や筋トレなどの身体づくりから、シアターゲームやエチュード（テーマに沿って即興で演技を行う）での演劇応用練習、台本読みを行っています。演劇経験がなくても楽しめる内容となっているため、最初は演技に自信がなかった制作部のメンバーも興味を持ち、さまざまな芝居に挑戦しています。

主な公演の場としては学内が多く、2023年春には新入生に向けて旗揚げ公演を行いました。また夏にはオープンキャンパスの面接講座にて面接の良い例、悪い例を演劇で紹介し、秋には学園祭で朗読劇を行いました。少しずつですが活動の場を増やしていき、ゆくゆくは学外で公演をしたいと考えています。そのためにも、日々新しい脚本のアイデアや活動の場を探し中です。

●個性豊かなメンバーで活動しています

演劇はよく敷居が高いと思われがちですが、小さいころよく遊んでいた「ごっこ遊び」に演出や音楽、照明が加わり、歴史上の人物や妖精、恐竜にもなれる究極の遊びです。「劇団ENCORE」では、個性豊かで多才なメンバーが学年や学科の壁を越えて仲良く活動しています。ぜひ、一緒に演劇をやってみませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください（見学希望者はInstagram:iuhw_encoreへご連絡ください）。

大田原キャンパス　演劇部「劇団ENCORE」代表
理学療法学科　3年　崔 マリア

●演劇経験がないメンバーも早口言葉に挑戦中

●旗揚げ公演、新しいお芝居にも挑戦しています

広報誌 IUHW 135　2023年11月30日　発行：学校法人 国際医療福祉大学　ホームページ https://www.iuhw.ac.jp/

〔大田原キャンパス〕栃木県大田原市北金丸2600-1 Tel.0287-24-3000
〔成田キャンパス〕千葉県成田市公津の杜4-3 Tel.0476-20-7701
〔東京赤坂キャンパス〕東京都港区赤坂4-1-26 Tel.03-5574-3900
〔小田原キャンパス〕神奈川県小田原市城山1-2-25（本校舎） Tel.0465-21-6500
〔大川キャンパス〕福岡県大川市榎津137-1 Tel.0944-89-2000
編集：広報部　デザイン：（株）日経ピーアール